

# タイム・ストップ

甲斐博志

街はクリスマスを明日に控え、色づくイルミネーションが輝き、昨日よりも一段と華やいで見えた。大型ツリーがある駅前も、今夜は若いカップルでいっぱいであった。それに、店のチラシを配るサンタクロースが、賑やかな駅前をうろろして、クリスマスの雰囲気を盛り上げるのに一役買っていた。いつもは、宣伝のチラシもわずらわしいだけだが、今夜はなぜかそれも気にならない。

「どうですか」

サンタクロースが、チラシを一枚くれた。

「ありがとう」

不思議なもので、いつもなら受け取ったりはしないし、受け取っても離れた所で処分するのだが、今夜はそれもしない。どこのチラシでも、そんなに邪魔になるものではない。持つて帰って目を通すぐらいのことはしてもいいと思えるのだから、こう言う時期の人の心理は不思議なものだ。

銀行員である野村博志は、明日が日曜とあって、どことなしに気持ち弾んでいた。今夜がイブで明日がクリスマス。子供達の一番楽しい時期である。いやいや子供達ばかりではない。大人だってこんな夜は楽しい。

娘の美夏（みか）は小学校一年の二学期を終えて、冬休み。楽しい思い出をたくさん作ってもらいたい。

（早いもんだな。美夏は、もう7歳になっているのか）

博志が5歳下の亜矢子と結婚したのは10年前で、3年後に美夏が生まれた。博志は35歳で中堅管理職。下から突き上げられ、上からは小突かれ、何一つ思うようにいかない、おもしろみもない中間地帯であった。それでも、世間的には一般以上の生活はできているし、家族も博志が描いていた以上の理想の家族で申し分もなかった。

しかし、家と銀行とのギャップが激しければ激しいほど、やりきれない気持ちになり、休み明けの仕事がおっくうになってくる。日曜の晩などは、俗に言うサザエさん症候群になるのであった。それでも、休みの前日ときたら、子供のようにはしゃぎたくなる。

「ただいま」

「おかえり、パパ」

いつもより早い時間に帰って来たので、喜んでくれているのか美夏がうれしそうに抱き付いて来た。

「今日は、イブだから美夏と一緒にケーキが食べたくて、仕事を早めに切り上げて帰って来たんだよ。うれしいだろう、美夏」

「あなた、お帰りなさい。でも、そんなことしていいのかしら？」

「あー、かまうもんか。たまにはいいんだよ。こんな日もないとなー、美夏」

美夏は、にこにこ笑っているだけで何も言わない。

「先にお風呂にしますか？」

「そうだな。風呂から上がって、ゆっくり美夏とケーキを食べるとするか」

「パパ、早くお風呂から上がって来てね」

「あー、分かったよ」

この時期、通勤で冷えた体を温めてくれるのは、我が家の暖かい安らぎと現実的には風呂であった。まさしく一日の疲れを癒してくれた。

風呂から上がった博志は、綺麗に飾られた我が家のツリーを見て、美夏と同じで小さくてとてもかわいいと思った。ポインセチアやクリスマスローズが所せましと陣取って、ツリーをより一層華やかにしてくれている。

「美夏、ママと飾ってくれたのか？」

「うん、まだ、途中なの…」

亜矢子が美夏を見つめて、

「美夏、うんじやないでしょう」

「はい」

「今日は、クリスマス・イブだから、パパは大目に見て上げるよ、美夏」

「はい」

みんなで食事をした後、亜矢子がケーキを運んで来た。

「まるで、美夏の誕生日みたいだな…」

「ママ、美夏、ここのサンタさんのところね。お願いよ」

「はい、大丈夫よ、パパもママも取ったりはしないから」

切られたケーキが、小皿に盛り付けられて、一番に美夏のもとへ。

「はい、お食べなさい」

「わー、ありがとう。ママ」

「はい、あなたも」

「あー、美味しそうだ。ママ、ありがとう」

ケーキを食べながら、博志は美夏に聞いた。「美夏、今年はサンタさんに何をお願いしたんだ？」

「犬のぬいぐるみ」

「そうか、犬のぬいぐるみか。美夏が、おりこうさんにしていたので、きっと叶えてくれるよ」

「サンタさん、美夏のお家忘れていないかな？」

「あー、大丈夫だ」

「わー、うれしい」

ケーキをみんなで食べた後、博志は居間のソファアームに座り夕刊を読み始めた。テレビからは、イブのスペシャル番組であろうか、クリスマス・ソングが、流れてきている。美夏が、楽しそうにツリーの飾り付けをしながら、大声で歌っている。

子供の姿を見ているだけで、心が癒される。仕事から解放された安らぎの時間であった。親にとって、子供が一年無事に過ごしてくれて何も起こらない平凡な年が、これほどうれしいことはない。博志も亜矢子も、まさにそうであった。

夜9時を過ぎた頃、珍しくこの都会にも雪が降って来た。

「美夏、見てごらん。雪だよ」

「えーっ?…」

「積もるといいね、美夏」

と言って、博志は窓際に立ってみた。美夏も珍しい雪に喜んで、急いで博志の所へよって行った。亜矢子も、片付けの手を止めて、窓際によって来た。

「美夏、お庭に出てみようか？」

「うん」

博志が、庭に出てみると、降り出したばかりの雪は、すぐに解けてしまうけれど、粒も大きくしばらくは止みそうもないように思えた。雪がめずらしい美夏は、庭ちゅう走り回って喜んで、はしゃいでいる。

「雪だ。雪だ」

「美夏、明日は、雪合戦だ」

「うん」

亜矢子が、二人の姿を見て、やさしく、

「風邪をひくといけないから、もうお入りなさい」

「そうだな、美夏。もうお家に入るうか？」

「はい、パパ」

イブの夜、この空のどこかでサンタクロースが、ジングルベル、ジングルベルと鈴の音を響かせているようにさえ感じた。そーっと耳を澄ませば、聞こえて来そうな、そんなイブの夜だった。

都会のベッドタウンのこの街は静かだ。この街に降る雪は、音もなく深々と降り続いているが、それとは正反対に今夜はどの家庭でも、賑やかで楽しいイブの夜を迎えているに違いない。そして、子供達はサンタクロースに見守られながら、楽しい夢を見るに違いない。

翌日、博志が目覚めてみれば、やはり雪は積もっており、これが本当のホワイト・クリスマスであった。博志より、早く目覚めた美夏は、サンタクロースの贈り物を、我慢できずに開けていた。

「美夏、おはよう」

「ねー、パパ見て。サンタさん、美夏のお願い聞いてくれたみたい」

「美夏、パパがおはようって言っているのよ」

「おはよう、パパ」

「あー、おはよう。どんなプレゼントをサンタさんからもらったんだい？」

「ほら、見て」

「えらく大きなぬいぐるみだな。でも良かったな、美夏」

「うん」

無邪気に喜ぶ美夏の姿がかわいくて、博志が亜矢子の方を向いて、目顔で応えた。亜矢子が博志に、朝食はと尋ねたが、博志はコーヒーだけでいいと言って、新聞を持って2階の書斎へ上がった。

書斎でゆっくり新聞を読んでいると、美夏がノックして入って来た。

「パパ、コーヒーよ」

「ありがとう。美夏、後で雪合戦しようか？」

「うん」

「そしたら、新聞を読むからその後で、お庭で遊ぼうな」

「はい」

博志は、コーヒーを啜りながら、ゆっくり新聞を読むのが、休日の日課である。家の中でも、自分一人の時間が欲しい時は、書斎に入り、本を読んだり、ビデオを見たりして過ごしている。一日の半分は、自分のためにリフレッシュする時間を作っている。後の半分は、もちろん美夏との遊びの時間である。

30分ほど、新聞を読んだ後、庭に出てみると、昨日からの雪が解けもしないで残っている。美夏は、一足早く庭に出て、雪だるまを作っていた。「よいしょ、よいしょ」と、雪を集めていた。博志は、美夏に気付かれないように、後に回り、美夏に掴んだ雪を「ほれっ」と言っけて投げた。それに、驚いた美夏が「キヤーツ」と悲鳴を上げながら逃げて行く。

「パパ、ずるい」

美夏も投げ返してきた。

「やったな、美夏」

「えいっ」

「こいつ、やるか」

いつの間にやら、美夏も本気になり、固く握った雪を博志目にかけて、思いつきり投げた。博志は美夏に隙も与え、手加減しながらだったが、子供相手の雪合戦といえども、かな

り疲れた。美夏が壁際に隠れているかと思えば、後から隙をつかれて博志がやられる。博志も美夏の後ろに回ったりと、互いに逃げ回ったり、投げ合ったりしているうちに汗をかくほど熱くなってきた。

「美夏、パパの降参だ。参った」

博志の吐く息が真っ白で、はーはー言っている。美夏は、さほど疲れもなさそうで、博志を相手に勝ったことを喜んでいる。

「美夏、今度は雪だるまを作ろう」

「うん」

「近所のみんなが、びつくりするような大きなものを作るから、美夏は、お庭の雪を集めて」

「はーい」

「パパは、あの階段から道路にかけての雪を集めて来るからな」

階段は敷地内にある階段で、博志の自宅は高台に建っており、下は掘り込み式の車庫である。それに道路と言っても、車の往来の激しい道路ではない。この住宅地の者だけが利用する安全な道路である。両手いっぱい集めた雪を抱きかかえ、美夏の所へ置いた。

「わー、パパすごい。すごい」

「まだまだ、持って来るからな。今度はあの道路の分を取って来よう」

普段、雪の積もる地域ではないので、博志には油断があった。階段附近の雪は、博志が取ったので、雪自体はないのだが、滑りやすくなっていた。雪がないから、博志は大丈夫だと思いつみ、道路の雪を取りに行くために、急いで階段を降りようとして、数段降りた所で、足を滑らせて尻と背中を思いっきり打ってしまった。一瞬のことで、何が何だか訳が分からなかった。尻と背中に激痛が走る。息が途切れそうなくらい痛く苦しい。しかし、起き上がれない訳ではない。ほんの数分だと思いが、その場にいた。どうにか起き上がった。不思議なことに起き上がれば、何もなかったように動き回ることができた。幸い、美夏は気付いていなく、一生懸命雪だるまを作っていた。珍しく、どこかで救急車のサイレンの音がはつきりと聞こえていた。近所で、何か不幸なことでも起こったのだろうかと思っていたが、救急車の音はするものの、どこにもそれが見当たらなかった。博志は庭の柵越しに救急車を探してみた。美夏は、博志が傍に来ていることを全く気付いていない。階段を降りて、雪を集めに行っているとばかり思っていたので、博志の存在に気付いて驚いた。

「何だ、パパいたの？ パパ雪は？」

「あー、そうだった…」

博志も、ふと不思議に感じた。立ち上がるところまでは覚えてはいるけれど、その後、どうしてこの場所に居るのが、さっぱり分からない。

（あー、救急車の音に気を取られて、それで俺は無意識のうちにここに来たんだな。自分が、ここまで来たことも記憶にないなんて、どうかしているな？…）

美夏の方を振り向いて、

「美夏、さっきの救急車、どこのお家に行ったのだろうね？」

「救急車が、来たの？」

「美夏には、聞こえなかったか？」

「救急車の音なんか、聞こえなかったよ」

(子供って本当に無邪気だな。夢中になると、何もかも分からなくなるんだからな？…)

柵越しに、道路に積もった雪を見て、

「さー、雪だるまの大きいのを作るぞ」

「あなた、誰に言っているの？」

その声に驚いて、振り向いてみると、そこに美夏はいなく、亜矢子が立っていた。それに、半分解け掛けた雪だるまが残っていて、さっきまで雪が積もっていたはずの庭に、雪がもうほとんど解けてなくなっていた。もう一度、道路の方を振り向けば、路面が現れ、解け掛けた雪が所々で水溜りのように汚くなっているではないか。博志は、振り向いて亜矢子に聞いた。

「この雪だるま、どうした？」

「何言っているの？ さっき美夏と作っていたじゃないの…」

「そうだよな。さっきのやつだよな。ところで、美夏は？」

「ソファアの上で寝ているわよ」

「そっか、美夏は疲れたんだな」

「あなたこそ、ずっと庭で雪だるまを作っていたのだから、家に入ってゆっくりしなさいよ。

お茶でも入れましょうか？」

「あー、そうしてくれるか」

博志は、居間のテーブルにつき、お茶菓子用のクッキーを一つ摘みながら、さっきの不思議な出来事を、どう理解していいのかが分からなくなっていた。階段で滑った拍子にやはり頭でも打ったのではないかと感じたぐらいだ。

(記憶が、飛んでしまうなんて…)

「どうしたの、あなた、何かあったの？ コーヒーにしますか？ それともお茶がいいですか？」

「そうだな。お茶にしてくれるか？」

「はい、分かりました」

亜矢子が入れてくれたお茶を飲みながら、

「さっき、階段で滑ってな。お尻と背中を思いっきり打った。何ともないと思うが、ちょっと見てくれないか？」

「打ち所が悪かったの？ 頭でも打ったの？」

「いや、頭は大丈夫だと思うんだが、背中からお尻にかけてな」

「どれ？」

博志はズボンのベルトを緩めて、セーターとシャツを上げて亜矢子に背中を見せた。

「背中は大丈夫みたいだし、頭も打っているような所はないわよ」

と言って、ズボンをいきなりずらした。

「おい、やめろよ。何をするんだ？」

「お尻も打ったのでしょうか？」

「でも、いきなりずらすやつがあるか？」

「いいじゃない夫婦なんだから。お尻も大丈夫よ」

と言って、博志のお尻をパチツと叩いた。

「恥ずかしいじゃないか？ 美夏が見たらどうするんだ？」

「一緒に見てるわよ」

「何、美夏は起きていたのか？ まいったな、もう…」

「パパが、ママに負けたの？」

「そうじゃないよ、美夏」

「そうよ、ママがパパに雪合戦で勝ったの

よ」

「ママが勝ったのね？ パパ、ママと雪合戦したんだ。ずるーい」

「おい、何を言ってるんだ。俺は上に行くからな」

それから、博志は書斎に入り、好きな時代劇のビデオを見始めた。忠臣蔵であった。12月に入ったばかりの時に、民放で放送されたものをビデオに録っておいたのである。浅野内匠頭の切腹のシーンでは泣いた。赤穂浪士・大石内蔵助が、吉良上野介を討ち取った時にも泣いた。感動と興奮の時代劇であった。久々の良いビデオに満足していた。この時代劇に夢中になっていて時間が経つのを忘れていたが、そろそろ夕暮れ時である。2階のベランダに出て外を眺めていると、三軒隣りのおばあちゃんが、どう見ても犬に散歩させられているようにしか見えない姿が目についた。また、逆の方からは、吉岡さんが自分と同じぐらい大きな犬に引きずられながらやって来るのが見える。

（あれ、吉岡さん、いつから犬を飼い始めたんだ。あー、そう言えば、亜矢子が言っていたな。吉岡さんの旦那さん、メタボリック症候群なんですって、と…）

冬でも、汗をかきながら犬に引きずられている格好は、かわいそうにも見えるが面白い光景でもあった。思わず、笑いがこみ上げてくるのである。

（吉岡さんも、メタボで苦しんでいるのか、こりゃー大変だな。あはは…）

しばらくして、夕食の仕度が整い、みんなでクリスマスの夜を迎えた。昨日ほど手の込んだ物はなく、簡単な食事であったが、それでも美味しく楽しく食事をした。一家団欒、イブの夜とクリスマスを家族で過ごせたことは、美夏にとつても良い思い出として残ってくれるはずだ。クリスマスは終わるが、今度は年始の休みが待っている。今年も、残すところ、本当に後わずかである。

(後、1週間、辛抱して頑張るか？ でも、まだ、1週間もあるのか…)

日曜の晩のテレビを見てみると、明日のことが頭をかすめて行く。時間が経つことに明日に近付いて行く。行きたくもない銀行に行かなければならない。

(俺は、道を間違えたのかもしれない…)

美夏を見れば楽しそうに一人で遊んで、何の不安もないように感じる。亜矢子の方は、後片付けに専念して、主婦業を満喫しているようにさえ見える。このような情景を見れば、仕事に行くのが、さらに嫌になる。博志は、自分もつと有意義に楽しく過ごすことができれどと思うのである。時間が止まってくれたなら、どんなに幸せかと博志は思った。しかし、それを大声で言うことなどできないし、美夏の前では弱音は吐けない。

(働かねばならない。でも、仕事はしたくない。明日なんか来なければいいんだ。時間よ止まってくれ。神様、頼むから…)

そんな叶いもしないことを真剣に博志は考えているのだ。仕事に対して、やり甲斐をなくしてしまっているせいだ。

徐々に、時間は経って行き、もう寝る時間が来た。

(明日は、明日の風が吹くか…。どうにかなるだろう。どうしようもないことだ)

亜矢子は、博志がそこまで悩んでいることなど全く知らないでいた。時として、銀行の愚痴を聞くけれど、耐え難いほどの悩みを持っているなんて知るよしもなかった。

「あなた、もう寝ましょう」

「あー、そうだな。おやすみ」

「おやすみなさい」

翌日、博志は寝坊したと思った。

(しまった、こんな時間か？ なぜ亜矢子のやつ、もっと早く起こしてくれなかったんだ)

慌てて博志が居間に行ってみると、美夏は昨日と同じようにぬいぐるみで遊んでいた。博志は、美夏の方を向いて、

「美夏、おはよう」

「ねー、パパ見て。サンタさん、美夏のお願い聞いてくれたみたい」

「美夏、パパがおはようって言っているのよ」

「おはよう、パパ」

美夏だけではない。亜矢子までが、全く昨日と同じようにしゃべっている。

「亜矢子、なぜもっと早く起こしてくれなかったんだ。遅刻するじゃないか？」

「何、言っているの？ 今日日曜よ」

「えっ?…」

(そんなバカな？ 日曜日ってことがあるもんか？ 何、勘違いしているんだ)

博志は、新聞を見たら分かるはずだ。今日が月曜だと言うことが。



「今日の新聞どこかな？」

「ソファアのテーブルの上に置いてあるわ」

博志は、新聞の日付を見た。

「これが、今日の新聞なのか？」

「そうよ」

（不思議だ。真新しい新聞だ。昨日、俺が読み、折り目やシワを付けていたはずだが、それがない）

「ねー、パパ見て。サンタさん、美夏のお願ひ聞いてくれたみたい」

さっき言った言葉を美夏はまた口にした。博志も昨日と同じように応えるしかなかった。

「どんなプレゼントをサンタさんからもらったんだい？」

「ほら、見て」

（昨日と全く同じだ。いったい家は どうしてしまったんだ？…）

「あなた、朝食はどうします？」

「あー、そうだな。コーヒーだけにしてくれるか？」

（そうだ、テレビはどうだ？）

居間ではテレビをつけなくて、あえて、書斎に行ってテレビをつけた。日曜の朝の番組が放送されていた。それでも、博志は、まだ信じられなくて、

「そうだ、雪だ。日曜の朝なら雪が積もっていたはずだ」

と思い、ブラインドを上げて、ベランダに出てみた。

（雪が、積もっている。本当に今日は日曜なのか？）

5分ほどして、ドアをノックする音が聞こえた。

「パパ、コーヒーよ」

「ありがとう。後で雪合戦でもしようか？」

「うん」

「そしたら、しばらくしたら庭で遊ぼうな」

「はい」

博志は、こう言わざるを得なかった。

（待てよ、俺は正夢を見たのかもしれないな。しかし、あれが、夢ならリアルだったよな）  
不思議であった。何もかもが、夢とそっくりである。しかし、博志は無理に昨日のことを夢だと思い込ませただけで、実際には割り切れないものを感じていたし、逆に、今の現実が夢なのかもしれないも思った。

（でも、かまやしないさ。夢であろうが、現実であろうが、今日はゆっくりできる。仕事に行かないでいーんだから、気が楽でいい。ザーっと、日曜でも悪くないな）

そう思えば、それ以上のことは考えないようにして、しばらくして庭に出て、美夏と雪合戦を始めた。夢の中でも、疲れたが実際の雪合戦は、35歳の博志にとっては、やっぱりきつい。これが現実でなくして、何だと言おうか？ 今は、夢ではない。まさしく現実である

と、そう確信した。

「美夏、今度は雪だるまを作ろう」

「うん」

「近所のみんなが、びっくりするような大きなものを作るからな。美夏は、ここらの雪を集めて」

「はい」

「パパは、階段附近の雪を持って来るからな」

「はい」

博志は、夢と同じように、両手にいっぱい雪を抱きかかえ、美夏の所に持って来た。

「わー、パパすごい。すごい」

「まだまだ、持って来るからな。今度は、あそこから取って来よう」

と博志は言って、道路の方を指さした。ふと記憶が甦るかのように思い出した。道路の雪を取ろうと思ひ、階段で滑ったことを。やっぱりあれは夢だったのだ。正夢を見させて、気を付けさせたかったに違いない。あの夢を見ないでいたら、本当に大ケガをしているかもしれない。用心しなさいと言う夢だったのだ。これで、頭の中のもやもやがすっきりしたように感じた。

博志は、階段を滑らないように、そろりそろりと降りて行き、道路の雪を、かき集めて両手にいっぱい抱きかかえ、用心しながら、階段を上がって、美夏の所に行った。

「美夏、いっぱい持って来たぞ。どうだ」

美夏は夢中になっているのか、博志が来たことに気付いていない。

（子供って、本当に無邪気だな。夢中になると、何もかも分からなくなるんだから…）

その時、「あなた、しっかりして」と、泣きながら言う声はつきり聞こえた。

「美夏、今の声は誰だろうね？」

「何だ、パパいたの？」

「美夏には、聞こえなかったか？」

「救急車の音なんか、聞こえなかったよ」

一瞬、博志はぞーっとした。博志は、今、救急車とは言わなかったはずだ。思い出したが、救急車と言ったのは、あの夢の中だけであった。美夏が救急車のことを知っているはずがないのに、なぜだと思つた。不思議に感じながらも、庭の柵越しに声の主を探してみた。しかし、見える範囲の所では誰もいなかった。探すのを諦めて、雪だるま作りの続きをしようと思ひ、

「さー、雪だるまの大きいを作ろうな」

と言つたら、美夏の声はせず、

「あなた、誰に言っているの？」

亜矢子の声に驚いたが、これも、まさしく夢の通りであった。更に、夢と同じで、振り向いた時には、雪だるまは作られた後で、時間が経って解け掛けており、積もっていたはずの

庭の雪もほとんど解けてなくなっていた。道路の方を振り向けば、汚れた路面が現われており、所々で水溜りのように汚くなっていた。夢の記憶が、また甦った瞬間だった。

「この雪だるまは？」

「何言っているの？ さつき美夏と作っていたじゃないの…」

「そうだったな。美夏は、ソフアーか？」

「ソフアーの上で寝ているわよ」

「そうか、疲れたんだな？」

「あなたこそ、ずつと庭で雪だるまを作っていたのだから、家に入ってゆっくりしなさいよ。お茶でも入れましょうか？」

「あー、頼むよ」

博志は、だんだん不気味に感じてきた。夢であっても、言葉の一つ一つが同じになることはありえない。夢の記憶はいい加減なものかもしれないが、美夏にしろ亜矢子にしろ、全くと言っていいほど夢と同じ言葉を遣っている。あるいは夢と思いついたのは、本当は現実にあつたことではないのかとさえ思えてきた。

（なら、それは昨日で日曜のはずだ。そしたら、今日は月曜じゃないのか？ なぜ、日曜なんだ？…）

時間が止まっているのか？ いや、そんなことはあるはずがない。ある訳ない。ただ、単に偶然似たような夢を見ただけなんだと思いついた。そうする以外に、博志にはこの状況を把握することができなかった。

博志は、居間に戻り、テーブルの椅子に座った。

夢と違うのは、博志は階段で滑っていないことである。それは、避けたものの、それ以外は避けられないように思えた。

（夢と同じように動いてやらなければならないのか？）

「どうしたの、あなた？ コーヒーにしますか？ それともお茶がいいですか？」

青ざめた顔の博志が、

「うーん、そうだな、お茶をもらおうか」

と言った瞬間、博志は一度逆のことを言ってみたらどうなるだろうかと思いついてみた。

「いや、コーヒーにしてくれるか？」

「はい、分かりました」

亜矢子が返事して、出てきたものは、コーヒーではなくお茶であつた。

（やっぱり、亜矢子も美夏も、夢と同じようにしてやらないといけないのか？…）

亜矢子は、何かを言いたそうにしている。そうか、夢では、この時、滑ったことを言っていて、背中を見てもらったな？ 亜矢子は、俺のその言葉を待っているのか？ 仕方なしに、博志は夢で言った言葉と同じようなことを言った。

やはり、亜矢子は夢と全く同じことを言っていて、最後にお尻を叩いた。

博志は、2階の書斎に上がり、頭の中を整理してみるが、この家に起こっていることがさ

っぱり理解できずに、だんだん疲れてしまい、眠くなってきた。時間は、昼をまわったばかりであった。

「1時5分か、少し横になろう」

書斎に置いた応接のソファにもたれて、ぐっすりと眠った。一時間近くは寝ていたはずである。さつき動き回ったせいで、体の疲れもあったが、すっかり取れている。昼寝したおかげで、気持ち良かった。

「いったい、何時だろう？」

時計を見た。博志は自分の目を疑った。あれほど気持ち良く寝ていたにもかかわらず、時計は1時5分のままで、少しも経っていないのである。気が狂わんばかりの衝動にかられながらも、いったい何が自分達に起こっているのだろうかと必死に考えた。

「時間は経たないし、亜矢子も美夏も夢と同じことしかしかない。いったい、どうなっているんだ：」

理解しようにも理解ができないが、時間が経たなかった理由は、あるいは博志が夢と同じことをしなかったせいなのかもしれないと思った。そして、亜矢子も美夏も夢と違うことをさせても無理で、仕組まれたロボットのようには動かない。

「時間を進ますには、夢と同じようにビデオを見るしかないのか？」

時間の止まった世界などに、いたくないと思った瞬間、急いでデッキにビデオテープを入れた。博志が想像したようにビデオテープを入れれば、時間は経っていった。

「しかし、こんな現象は家(うち)だけなのか？　そう言えば、夢では夕方、三軒隣りのおばあちゃんと吉岡さんが、犬の散歩をさせていたな。夢の通りなら、きつと夕方、現われるはずだし、あの人達ならまともだろう。普通の話ができるかもしれない」

亜矢子も美夏も、仕組まれたロボットだ。今は、夕方現われる二人を待つしかない。博志は、時間が経つのをイライラしながら待つ間も、ビデオテープは、そのまま再生されており、ビデオをそっちのけで書斎の中をうろろするばかりであった。時間は、止まらずに流れてくれた。夕方まではもう少しだ。2階の書斎の窓から、ずーっと外を眺めていた。どれぐらい過ぎただろうか、三軒隣りのおばあちゃんの姿が見える。反対側を見てみれば、吉岡さんが犬に引きずられながら歩いて来る。

「吉岡さんだ。行ってみよう」

そう思った瞬間、2階から降り、玄関を出て吉岡さんの所へ走って近よった。

「よ、吉岡さん。野村です。待ってくださいですか？」

吉岡さんは、呼ばれた声の方向に振り向こうとした瞬間に、変な動きをしたかと思えば、映像が乱れるかのようにザラザラとした感じになり、急に消えてしまった。

「何で、消えるんだよ？　俺が、な、何をしたと言うんだ」

気が狂いそうなほど、博志は混乱していた。頭を抱えて、どうなっているんだと叫んでいる横を、おばあちゃんが通り過ぎて行った。

博志は、おばあちゃんの後姿を見て、おばあちゃんと声をかけてしまった。しまったと思っ

だが、もう遅かった。吉岡さんと同じように振り向きざまに、おばあちゃんも消えた。

「どうなっているんだ。ここは本当に地球なのか？ 地球に似せた惑星じゃないのか？」  
考えても考えても、理解ができなかった。博志は住宅地の道路を頭を抱えて走るしかなかった。走っても走っても、人は誰一人として現われなかった。家に帰っても、ロボットの亜矢子と美夏しかない。その二人は感情のある人間ではない。博志が夢と違う行動をしたので、いつまで経っても夕日は沈まず、時間は止まったままであった。博志は、とうとう半狂乱に陥ってしまった。

「あー、あはは。時間が止まった世界で、俺は、一人になってしまった。助けてくれー。だ、誰か助けてくれー」

と大声で叫んでいた。その時、美夏の「パパ、しっかりして」と言う声が確かに聞こえたが、そこに美夏はいない。その後、すぐに亜矢子の「起きて、あなた」と言う声がした。「どこだ。どこにお前達はいるんだ？」

博志が叫んだ時に、博志の全身に激痛が走った。激痛が走ったかと思えば、博志の目の前に映った世界は、白い天井の見慣れない部屋であった。体は、何かで固定されているようだ。動くこうにも、全く動けなかった。

「あなた、気が付いたのね」

亜矢子が、涙を浮かべて泣いていた。その横をみると、美夏が、パパ、パパと言って博志の体を触ろうとする。博志は、なぜ、自分がこんな所にいるのかが分からなかった。

「あなた、私達、分かる」

亜矢子の声に、博志は頷いた。

「本当に良かったわ。あなたは、階段で滑ってね、頭と背中を殴打した時に、脊髄を損傷させて気を失ってしまったの。2日間、意識が戻らなかったのよ。本当に、良かったわ」

涙を流した亜矢子が手を握り締めていた。美夏も、うれし涙を浮かべながら、亜矢子と一緒に博志の手を握っている。

博志は、2日の間、現実を起こったその後を夢で見ながら、このベッドで寝ていたのか？滑った後は、全て夢の中だったのか？ 何と言うことだ。仕事が、辛くてもきつくても、健康で働ける環境があると言うことは、どんなに素晴らしいことだろうか。

「これからは、家族のために、もっと頑張らなければ…」

甲斐博志です。読んで頂き誠にありがとうございました。今後の制作において参考にさせて頂きたいと思いますので、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。

個人アドレス

kai.hiroshi@nifty.com

です。どうぞ、よろしくお願ひします。